

## 修士・博士のための海外渡航助成金報告書

広域科学専攻生命環境化学系 船水研究室 修士2年

西本 翔裕

11/11-15に、ワシントンコンベンションセンター（アメリカ、ワシントンD.C.）で開催された Neuroscience 2023 (Society for Neuroscience) に参加した。本学会は、生理学、認知科学、心理学、情報学、物理学といった、あらゆる方面から神経科学に関わる世界中の研究者が一同に会する大規模な国際学会である。参加経験のある日本の学会（日本神経科学大会や日本神経回路学会）と比較して、会場の広さや参加人数、多様性が桁違いだった。会場の前で動物実験に対するデモ活動が行われていたのが印象的だった。

筆者は、11/12に「視覚統合を解明するためのマウスでの新規行動課題の開発」に関する研究で、Visual Responses During Behavior のセッションにてポスター発表をした。ポスター会場は企業展示のブースと隣り合わせになっていたのだが、こちらも端が見えないくらい大きなホールで、自分のポスターなんか埋もれてしまうのではないかと不安になった。しかし発表には、マウスでの行動実験を計画中あるいは実験を開始していて苦戦している博士学生や、視覚統合研究に従事している研究者が多く訪れてくれた。課題設計の細かな条件に関する質問が多かったが、行動課題改善のためのアドバイスをもらえたり、視覚統合に関する議論をできたりして、非常に有意義な時間を過ごせた。普段から研究室内で英語での議論を経験していたおかげで、コミュニケーション自体には難はなかったが、色々な訛りの英語に対応するにはやや苦戦した。

11/11には、筆者が最も楽しみにしていた、C. Koch をはじめとした一流研究者の登壇する「意識研究」のセッションがあり、最新の意識研究の動向や今後の展望を網羅的に理解することができた。学びがあったことには間違いないが、一方で、筆者自身の印象としては、近年の意識研究が停滞しているようにも感じ、やや残念であった。セッションの後には、C. Koch（筆者にとって非常に参考となる論文を最近 Nature Neuroscience から出版している）に直接話しかけることに成功し、論文についての質問や、知覚の時間統合および Panpsychism について議論することができた。議論の後には、ご著書にサインをいただいたり、一緒に写真をとっていただいたりすることまでできて、（研究自体とは関係ないが）筆者にとって貴重な経験となった。

本学会参加は、世界の神経科学研究を見渡す素晴らしい機会だった。渡航費を助成いただき、心より感謝申し上げたい。

